

広津和郎「やもり」の世界

一 愛なき結婚の憂鬱

広津和郎の「やもり」は大正八年一月「新潮」に発表された私小説である。大正四年一月に下宿永田館の娘神山ふくとふとした過ちで関係を持った広津自身の身边を素材にした作品である。子どもまで産ませた女性と結婚しようか別れようかと苦悩しながらも、自ら結論を見出せず、大正五年八月師崎に保養中の父を尋ね今後のことを相談しようかと決意するまでの一年半余りの私生活が「私」の回想として描かれている。

私はその頃苛立っていたと述べたが、その苛立ちの原因があったのである。というのは正月頃から宿の娘である年上の女との関係が始まっていたということであった。もっとも愛情からそういうことになったのなら、苛立ちはしなかったであろうが、凡そ愛情というものとは程遠い一種の衝動的なもので、烈しい後悔が直ぐ後を追うかけて来たような関係であった。(『年月のあしおと』「群像」・昭和三十六年一月)

広津が毎夕新聞社の営業局長と衝突し社を退職することになったのも、もともと退屈で忙しいばかりの仕事に嫌気がさしていたのが原因だが、契機となったのはこのふくとの関係による苛立ちであった。外では

前 芝 憲 一

面白くもない仕事が続っており、内では「牢獄の監房」のような下宿部屋で悶々とする日々が続いている。まさしく内憂外患の人であった。広津の自筆年譜(『現代日本文学全集四八』改造社・昭和四年十一月)でも、大正四年は「愉快ならざる結婚生活」の「最も心暗き時代」と回想されているが、さらに最悪なことには大正四年十二月に長男が誕生する。しかし、それは「衝動的」とはいえ、二・三ヶ月も肉体関係を持ち続ければ当然の結果であった。

一方に傾けば無責任になり、一方に傾けば又自滅となる。人間のこの感情は不思議な作用を我々の生活にしているものであると思ふ。(『自由と責任についての考察』「新潮」・大正七年七月)

はじめの「一方」に女と別れるを、後の「一方」に結婚を代入してみると広津の置かれた状況がよく見える。「無責任」なことはしたくないし、「自滅」も嫌だというジレンマに身動きがとれなくなっている。「やもり」の「私」も、本心は「彼女と別れたいという一念」でありながら罪を犯したという意識から別れることもできない。また別れると「二人の間に一生不快な記憶が残る」と思い込み、卑怯なことはするまいと「意地」を張る。さらにモーパッサンの「父」の最後の場面と類似した夢を見て、妻子を捨てた時の良心の呵責や老後の侘しき、一人息子を失

うことへの恐れなどが頭を駆けめぐり、「暗い圧迫」におしつぶされそうになるのであった。その結果、「今から改めて彼女を愛そうと心掛けようしたり、「意志だ！意志の力だ！」と自己を鼓舞しようとする。しかし、「心掛け」や「意志」から愛が生まれてくるはずもなく、「私」は「不決断の憂鬱な日」々を送らざるを得なくなり、女との「夫婦生活」をずるずると送る。

男女の結びつきを翻訳語の「愛」で考える習慣が日本の知識階級の間に出てから、いかに多くの女性が、そのために絶望を感じなければならなかっただろう？（伊藤整「近代日本における『愛』の虚偽」思想・昭和三十三年七月）

伊藤整は、「愛」という言葉は単なる「翻訳語」であり、日本ではその実質を持たず、「信仰による祈り、懺悔などが無い時に、夫婦の関係を『愛』という言葉で表現することには、大きな、根本的な虚偽が実在している」と断罪する。「愛」の短絡的な輸入によって、男も女もこの「怖ろしい言葉」に振り回され裏切られるのである。

この「やもり」の主人公も結婚には純粋な「愛」が必要であると思いつ込んでいる知識人の一人である。だからこそ、愛情から持った肉体関係なら「苛立ち」は生じしなかつたであろうと錯覚する。しかし、肉体関係はいつも「衝動的」なものであり、祭りの後の寂しさは愛の有無なく訪れるものである。また長年の夫婦生活の中で互いのエゴイズムが間欠泉のように噴き出すたびに苛立ちは生まれてくる。「やもり」の「私」は、結婚には愛が必要であるという強迫観念を持っている。それに対し女は、愛など求めず、肉体で結ばれたその結果だけに縋りつき、子ども「父親」だけを求める。ところが、この二人はもう事実上「夫婦生活」

に入りこんでいたのである。ここに「やもり」の結婚生活の悲劇があった。

「兎に角、卑怯な事は決してしたくない。中間に人を入れて、それで以て世間並の解決をつけてしまおうような、そんな方法は取りたくない。」（「やもり」）

この発言は「純粋な意味での道徳的の責任感」を表わすものではなく、自分自身に張った「意地」だという。なんであれ、「世間並の解決」を拒否する、この知識人としての倫理感が、先の「愛」の観念とともに、「私」をさらに苦しめる。卑怯なまねはできないが、かといって自力で関係を解消する勇氣も出ない「私」は、ただいたずらに時を重ねてしまふ。そして「ああ、いつか時が経ってしまった！」と嘆くしかなかったのである。

広津は他の愛情問題と同じようにすべてを時の流れにまかせ、自分の血を流すことで解決しようとはしていない。（間宮茂輔『広津和郎 この人と五十年』理論社・一九六九年二月）

ある男から「白水星の卯の男は「浮気者の人情家」で、自分で苦勞の種を蒔いては自分で自分を苦しめると言われた「私」は、自分の星まわりを噛みしめる。確かに「浮気者の人情家」ほど質の悪いものはない。「浮気者の薄情家」なら男も苦しめないし、女もあきらめがつく。優しさや人情は、時として人をひどく傷つけるのである。この「人情」が女に対する憐れみとなり、憐れみから夫婦生活を始めればいいのだが、知識人である「私」の頭の中では、そこに「愛」や「倫理」が持ちこまれ、

「憐むという事が直ちに愛になったら」と、また不毛な「愛」に立ち戻ってしまふ。しかし、それも束の間の幻想に過ぎず、「私」はまた現実の暗い壁に突き当たり、途方に暮れてしまふ。「愛」「倫理」「人情」といった、いわば知識人の三点セットが「私」と女を泥沼へと追いこんでいったといえる。

神山ふくとの関係を「一種の衝動的なもの」と言いつつ、その後も「夫婦生活」を続けていくことになったのも、結局は知識人の弱さのなせるものであった。「浮気者の人情家」広津は、このふくとの関係の後、両手に火傷を負った女給M子や画家にレイプされたという松沢はまなど複雑で悲しげな境遇を持った女性たちに、「人情」を発動し、「衝動的」に關係しては切ることもできず苦悩し続けていくのであった。

二 長男溺愛と喪失の恐怖

この「愉快ならざる結婚生活」を解消できなかった大きな要因は、長男の出産であった。子どもが「日に月に成長して行く」のを見るにつけ、父親としての本能が成長していったのである。現代なら「できちゃった婚」となるところだが、「私」には女に対する「愛」がなく、単なる「浮気」で「僅か二、三ヵ月」(『年月のあしおと』)の肉體關係に過ぎないという認識であるから「結婚」はできない。かといって子ども、しかも長男を手放したくはないというジレンマに陥る。

併し、自分に果して子供が手放せるだろうか?……若し今は一種の興奮からそうする事が出来たとしても、いつかは、それが苦しい記憶となって、私の心を絞めつけはしないであろうか?(中略)いつかの晩に見た夢が、彼女と成長した進一とが公園であそんでいる

あの夢が、私の心の底を掻き乱して来る。(「やもり」)

この「私」の夢とオーバーラップしているのが、モーパッサンの短編小説「父」である。文部省に勤める下級官吏のフランソワ・テシエは、通勤の乗合馬車で若い娘ルイズと知り合い恋に落ちる。二人は初デートの時に結ばれるが、ルイズは罪の意識に慄く。一旦は女をあきらめかけたが、しばらくして女は彼の所に身を寄せた。そして三ヶ月の肉體關係を持った結果は妊娠であった。しかし、その時男は女に飽きかけてきた時分で、別れることしか頭になかった。どうすることもできず困りはてた男は、最後の手段としてこっそり引越して行方をくらませる。幾年かの後、フランソワは年をとり相変わらず単調で憂鬱な官吏生活を送っていた。

ある日曜日のこと、たまたま、その日、彼は別の通りを歩いていたので、モンソー公園にはいつてみた。晴れた夏の朝だった。(中略)ところが、とつぜん、フランソワ・テシエはぞくつとした。一人の婦人が、二人の子供の手をひいて、通りすぎてゆくのだ。十ばかりの男の子と、四つの女の子である。それは彼女だったのである。(中略)

彼は人の情愛を受けることのない年老いた独身者として、みじめな孤独のなかで、身も世もあらず煩悶しつづけた。後悔や、羨望や、嫉妬や、また自然が人間の胎内に入れたあの幼い者を愛そうとする欲望からなる父親としての愛のゆえに、身もちぎれる思いで、はげしい呵責に、苦しみ悩みつづけた。(モーパッサン「父親」新潮文庫・青柳瑞穂訳)

「やもり」の夢は、「彼女を捨てて何処かに逃げ出してから幾年か経って、公園で彼女と進一とが遊んでいる姿を見かけて、後悔と進一に対する愛とに堪えかねて、その側に駆け寄りつとすると刹那眼が覚めた」と記されているが、これはまったくモーパッサンの「父」の要約である。さすがに作者も「眼が覚めてから、何だかそれと同じ話を前にも一度聞いた事があるような気がして、考えて見ると、それは嘗て読んだモオパッサンの『父』の最後の場面であった。」と補足説明を加えている。いわばこれは夢の種明かしであり、その「種」によって、一つの出来事を重層化させる働きを負わせようとしたのである。

「やもり」の夢と「父」の類似。たとえば三カ月の肉體關係、しかも単に女の肉體だけが目的で愛のない生活。女の妊娠と男女二人の子ども。「父」の場合、女の子は自分の子ではないが、広津には大正七年に長女桃子が誕生している。(そして、もし「私」が女と子どもを捨てたならば一体どうなるのか。その「私」の女と別れた後の悲痛な心境を代弁してくれているのが、「父」のフランソワなのであった。この「父」という短編小説の結末こそ、女・子どもを捨てた時の「私」の未来予想図そのものであった。ここで広津が実際にこのような夢を見たのかどうかという詮索はまったく無意味である。それは夢そのものが、眼が覚めて記された時点で一つの「創作」であるからだ。だから、この夢はモーパッサンの「父」そのものであるといっても間違いではない。「父」を読んだことのある読者なら、ここで「私」をフランソワに投影して、まさしく「私」の心情を重層的にとらえたであろうし、読んでいないものでも、要約だけで「私」の苦悩は推し測ることができる。

つまり、「やもり」での夢の働きは、「私」のいま置かれている境遇の象徴化であり、作家個人の身辺雑事の小説化の一つのレトリックであった。この他にも、ある夜、白衣を着た老人が枕許に現われ、「早く此家

を立退け」と叫ぶ「不思議な夢」の話がある。その夢を見た「私」は「心にただならぬ憎え」を感じる。そしてその夢のお告げどおりになった時、「私」は長男「進一の宿命」を心暗く思うのである。この夢も出来すぎというよりは、明らかに自己の行為の正当化のための跡づけである。その正否はともかく、ここでも夢は、子どもと「私」の宿命を暗示させ、それを色濃く印象づける働きをしている。

僕はとうとう結婚する事に決心した。最大原因は、云うまでもなく、進一が可愛かったからだ。自分がどうしても、進一を手放したくないと思ったからだ。自分が進一を愛している、それがたぬに進一を手放せない。(「波の上」「文章世界」・大正八年四月)

この長男進一に対する「私」の愛には人並み外れたものがある。広津が実際にふくとの婚姻届を出したのは、大正七年一月である。このことにより、これまでの内縁の夫婦生活が終わり、社会契約上の夫婦となった。「やもり」でも女に別れを切り出し、「進一はやっぱり俺に呉れ」と迫ったが、「あたしどんな事があったって、進一を放しはしなくてよ」と応酬された「私」には、もはや結婚する道しかなかった。女との結婚生活には何の喜びも見出せないが、フランソワ・テシエのように最愛の息子は失いたくないという中で苦渋の決断であった。

問宮茂輔は、広津の長男溺愛ぶりを、「頭がよくて敏感な賢樹(小説では進一)に対する愛はなみなみでないものがあった」(前述書)と回想している。また問宮の家に遊びに来た賢樹をわざわざ迎えに来た広津の眼には、「いとおしさがあふれ、賢樹、賢樹とその名」を呼び続けるほどであったという。実は、この広津和郎・賢樹の父子關係は、そのまま和郎と父柳浪との關係と相似をなしている。

明治という時代の一つの特徴は父子の対立、父子の相克に在ったといえるようにおもつが、広津父子のばあいは、悪くいうと《惚れ合った》ような愛情でかく結ばれていた。広津は「父さんは、父さんが」といい、父・柳浪は「和が、和は、和に」という。(間宮茂輔・前述書)

江口渙も『わが文学半生記』(『青木文庫・一九五三年七月)で広津父子の関係を「不思議なものに思われた」と回想している。柳浪・和郎・賢樹と続く父子愛は、小説「やもり」でも次の場面に象徴的に描写されている。

進一が「七月の投げ坐りをし始めた頃、「私」の下宿の部屋の向いの物干場に進一のおしめが干されていた。そのおしめがひらひらする度に、「お前が父なのだぞ。俺達はお前の子供のために役をつとめているのだぞ!」と叫んでいるように感じた。しかし、何とそのおしめは、かつて両親に買ってもらった裕衣で、鎌倉の海にそれを着て行き「浜で会う総ての少女になつかしさ」を覚えた、「私」の青春の想い出そのものであった。それがいつの間にか「私」に無断で解かれ、おしめにされていたのである。この女の行為は、「私」の明るく美しくかった過去の想い出の解体であり、それはそのまま現在の夫婦生活への絶望を象徴している。

しかし、このおしめはまた父・私・子をつなぐ役割を果たすものでもある。「私」はこれによって眼前に出現させられた家庭生活を嫌が応でも意識せざるを得なくなった。裕衣は両親と「私」の家庭を表わし、おしめは「私」と子どもの家庭を象徴する。この二つの家庭をつなぐものが、このおしめであった。

子どものおしめによって、父親・家庭というものを自覚させられ、父

親としての本能に目覚めてきた「私」には、モーパッサンの「父」のように子どもを喪失することを極端に恐れていたのである。

三 現実逃避 夜歩きと海と父

気弱なる斥候のごとく

おそれつつ

深夜の街を一人散歩す(石川啄木『一握の砂』明治四十三年十二月)

長男進一に対しては愛を感じながらも、着物をぐずぐずに着て身だしなみもしない女には、相変わらず「嫌悪の情」しか持てなかった。その「私」の部屋の隣には、三十二三歳の歯科医学校志望の浪人生がいつも大声をはり上げて本を読んでいる。また母屋には「始終私の一挙一動を睨んでいるような眼付」きをした彼女の母親がいる。そして、自分の愛する子どもが、まるで「敵国の手」にとらえられてちやほやされているような「淋しい腹立たしさと苛立」とに悩まされ、「私」は「気弱なる斥候のごとく」、敵地を忍んで通過するような「警戒の気分」で家を出る。そして東京の町を当てもなくほつつき歩くのである。

夜一人で又朝重を聴きに行く。女の義太夫を聴いていると総てイヤな気分が洗われるような気持がする。翌日の午后までは此気持がもっている。(志賀直哉日記・明治四十五年三月三十一日)

敵国から無事逃れ出た「私」は、四五人の友人の家を順に尋ねたり、暗くなるまでただ当てもなく東京の町をさまよい歩き、銀座通を何度も往復する。それは居場所のない淋しさを、群集の中で紛らわせようとし

ながらも、ますます孤独を痛感せざるを得ない行為であった。

活動写真に入ってはみたものの、それは「何等の興味」も起こさせなかった。そんな「私」が、「一カ月に二十三晩」も通ったのは、女義太夫であった。「しんみりした、その底に浮世のままにならぬといったような、悲しい厭世的」な情調が、まさしく「浮世のままにならぬ」仕組みに苛立つ「私」の心を静かに包んでくれるのであった。音楽は紛れもなく古今東西、心の癒しであった。特に悲歌は、それに感情移入することによって、現実の悲しみを昇華させてくれる。「私」は毎夜義太夫を聴くことによって精神の安定を図っていたのである。

夜が更け、「電車線路の敷石の上を、こつりこつり」歩いて行く時、「私」の心はまわりの静寂とともに次第に落ち着いていく。そして自省の念が起こり、彼女を憐れむ心が胸にこみ上げ、「そつだ、明日からは、又新たに努力をしよう」と決意する。しかし、下宿に帰り廊下を一步步くたびに、「今外で考えたすべての決心をくつがえしてしまつような堪らない憂鬱」が襲い、「たまらなく嫌だという感じ」がこみ上げてくるのであった。娘義太夫の切ない情調は、「私」のどうにもならぬ絶望感を癒してくれるし、夜歩きはその静けさの中で苛立ちを沈静化させるが、現実の「浮世のままにならぬ」苛烈さは、そんなすべてを飲みこんでしまつ。

七月の夏の太陽。毎日の不眠。都会の喧嘩。神経衰弱に陥つた「私」は、ついに下浦（現在の三浦市）に転地し、「海沿いの小さな宿屋の、海に面した二階の一室」で生活することになる。「私」にとって海は癒しの風景であった。広津は現実のどうしようもない状況に陥つたとき、決まって海に逃亡する。大正四年の春には、神山ふくとの煩しさや苛立ちから逃れるため、宇野浩一と三保の松原に行き、そこで三か月ほど過ごしている。大正五年七月には、「やもり」で描かれるように東京と下浦

の間を二三日おきに往復しているし、大正五年八月の父を尋ねての師崎行では、陸路もあつたが蒲群からの船旅を選択している。この船旅も癒しの空間であった。「やもり」でも「ほんとうに、少しの誇張でもなく、その時分の私に少しでもおちつきを与えて呉れたのは、その往復に乗る汽船の中だけ」で、「船の中が一番幸福」であつたと述懐している。大正七年三月には、長女桃子が誕生したあと、その現実から逃れるため伊豆の西海岸を船でまわっている。狩野川の汽船発着場の側で休んだ所は、やはり「小さな宿屋の二階」である。そして「海に出ると、何となく晴々した気持」がしてくるといい、「僕は下田に行こうと思つ。もつと行けるなら、もつと行きたい気がする。少しでも長く海を眺めていたい」と逃避に耽ける。

しかし、都会の夜歩きや娘義太夫が束の間の慰安しか与えられなかつたのと同様、いつまでも海辺や船上の人であり続けることはできない。見知らぬ土地の海辺。見知らぬ人との船上の旅。だが自由は孤独を自覚させる。そしてその孤独からまた自省の心が生まれてくる。

「私」は転地先で夕方になると「淋しい心を抱き」ながら、とぼとぼと小さな宿へ帰つてくる。ある時、一匹の蜻蛉がついついと自由に飛んでいるのを見て、「心が妙に淋しい静けさ」を感じながら子どもたちを考へる。そして「今度東京に帰つて行つたら、何かが自分を待っている」、「自分の今の苦しみを救つて呉れる新しい解決の仕方」が待っている、何もかもうまくいくと期待感に震える。しかし、東京の土を踏むやいなや「不快と圧迫」がまた襲うのであった。そして二日か三日おきに汽船で往復した挙句、「私」はまた「あの憂鬱な自分の部屋」に戻らざるを得なくなるのであった。

私は父とそうして向い合っていると次第に安らかな気持になつて

来た。子供の時分から父の前で感ずるあの安心が胸に来るのである。
 (中略) 父とさえ一緒ならばどんなに不幸に陥ってもどんなにひどい目に遭っても我慢出来ると云う気がして来るのである。(「若き日」
 大正七年十月)

柳浪・和郎父子の「相互の愛と理解」(間宮・前述書)については先に見たとおりである。「私」にとって父は精神的支柱であり、「現在の焦燥」を癒してくれる唯一の存在であった。師崎に療養中の父を尋ねる旅は、単なる逃避ではなく、「私」の救済を求める旅であった。父を訪ねるその日は、象徴的にも「嵐の後の静かな、平和な晴天」であった。「桜の木立の間から洩れる光が地面に真黄色な条をすうすうと描いて」「いる景色や父に会う光景、師崎の海岸の景色、どれもが「私」を明るくしてくれるのであった。これまでどうすることもできずにいた事態の解決の光が、父に打ち明けるといふ行為によってようやく射してきたのである。小説「やもり」の最後の場面は次のように結ばれている。

東京駅の中央の大時計は、丁度十一時二十分前を指していた。

「ここには、あと一時間あまりで日付けが変わりさえすれば、時がすべてを解決し新たな日々が始まるような、明るい予感に包まれている」「私」がいる。娘義太夫や夜歩きに逃避し、日々の安楽を得ながらも現実には容赦なくうち砕かれ、海に逃避しても逃げきれなかった憂鬱が、最後に「父」によって解消されようとするのである。

四 小動物への眼差し 二匹のやもり

長いあいだキンを貫いていた釘は、抜けたあと、なおキンの腹部に傷を与えた。やがて、キンは畳の上で落ちた。哲之は四つん這いになって、キンを恐る恐る掌に乗せ、木箱の中に入れた。(中略)
 「死ねへんぞ。死ねへんぞ」と言った。

「俺、夢を見たんや。もう、だいぶ前のことになるなア。蜥蜴になつて何回も生まれたり死んだりしていた」(中略)

「これは絶対に春の光や。キンちゃん、釘を抜いたら春が来たなア」
 (宮本輝『春の雪』文芸春秋・一九八四年十二月)

死んだ父親の借金を抱え母親と別居した大学生の哲之。手形の決済を迫るやくざから逃れ、大阪郊外の安アパートにこっそり移った晩、電気もない真つ暗な中で、手さぐりで柱に打ちつけた釘に貫ぬかれた蜥蜴。この身動きがとれぬまま何とか生きている蜥蜴の「キンちゃん」は、大学生の鬱屈した生活の象徴であった。ホテルのアルバイトでの様々な出来事と屈辱。恋人の陽子が他の男に取られてしまつかもしれない不安。やくざの恫喝と暴力。この様な状況の中で、主人公哲之は「キンちゃん」に語りかけ、慰められ、励まされ、そして感情移入し、自己を見つめていく。「キン」という小動物は自己の投影であった。

志賀直哉の『城の崎にて』(大正六年五月)での蜂や鼠、いもりなどの動物の死も、それを通じて、自己の生命を新しく見つめ認識しなおしていく一つの象徴的な出来事であった。いもりは偶然石に当たって死に、自分は電車にはねられても偶然に死ななかつた。そういう宿命のような「生き物の淋しさ」を、主人公はいもりの身になって感じているのである。

った。

広津和郎にも小動物を効果的に登場させた作品は多くあり、それらは『動物小品集』（一九七八年二月）としてまとめられている。広津桃子があとがきで「父のもつ一面、私の口から言つのもおかしいが、やさしさというのか、動物たちによせる細かい心遣いが思わ」れると述べているように、これは広津の佳作集である。「ある夜」（大正七年四月）での「げじげじ」の生態の細やかな観察、「線路」（大正七年十月）での「蛇」の死によせる思いなどは「やもり」に通底している。そこには、はかなく淋しい小動物の生命に対する作者の細やかな心情がうかがえる。

「やもり」で「私」の住む下宿は、「牢獄」であり「敵国」であった。まったく心の落ちつくところではなかったが、唯一「私」の心を慰めてくれる存在が二匹のやもりであった。母屋から廊下を渡って「私」の部屋に通じる梯子の下の白壁に立てかけてある古い障子が二匹のねぐらである。二匹は「恐らくそれは夫婦であつたに違いない」と根拠はないが、「私」はそう推測する。かつては悪魔のように毛嫌いしていたこの虫に、今の「私」は「一種何とも言われない興味」を見出し、「退屈と憂鬱と不快とが私の全身を押し」て来るとき、終夜彼らの行動と生態を見つめ続けるのであった。

私がああ牢獄の監房のような自分の部屋で、憂鬱と良心の呵責と此人生の味気なさとの悩みながら、人々の寝しずまった夜を、ひとりぼつねんと起きている時、あの一匹のやもりは、相変わらず私の部屋の梯子の下の白壁に、やがて近づいて来る冬眠の準備にと、小虫の餌食を探していた。彼等は六月頃に較べると、一層その身体が肥えているように見えた。何か充ち足りたと言つたような、一種の満足気な気分が、その醜く肥つたからだから、発散しているよ

うに思われた。（中略）「彼等は彼等の分を守って」さもこついった風に。やもりはやもり並に 私はそんな事を考えた。彼等の焦燥の少しもなさそうな、充ち足りたように見える生活、（中略）頭が憂鬱のために一種センチメンタルになって来る時には、実際、私は彼等醜い小さな虫の、少しの動揺もない生活が、自分のおちつきのない、苛立たしい生活と引較べて、考えられえして来るのであった。

「私」の苛立たしさと焦燥に満ちた結婚生活。それと比較されるやもりの「少しの動揺もない」「充ち足りた」夫婦生活。この二匹のやもりの生活に「私」は夫婦生活の一つの好ましいあり様を投影している。冬眠の準備のために夫婦共同で働く姿。そして毎夜毎夜、自分の領分の中で「倦みもせず疲れもせず」生きている姿。「私」はそこにこれからの自分たち夫婦の生き様を重ねようとしているのかもしれない。インテリであるがゆえの苦惱、愛や倫理や意地を捨て去って、自分の「分を守って」生きていくあり様を、このやもりの生活から読みとろうとしているのではないだろうか。

宝曆十二の春、遠江春谷の駅。横山某が居家の壁……俗にいう守宮虫真中を釘にさし通され……さるにても廿五年の月日、何としてか、かく生きながらへぬらん……この雌雄数年の間、喰物を運び喰はせたと見えたり。（西村白鳥『煙霞綺談』一七七三年）

志賀直哉の『暗夜行路』（大正十一年七月前編）の言葉を借りるなら、恋愛の情はいつまでも続かない。たとえ愛しあつて結婚したとしても、はじめの蠟燭はある時燃え尽くされる。それが「常燈明」であるために

は、第二第三第四と蠟燭を次から次にと次いでいかなければならないと言つ。

それが夫婦生活だとしたら、その蠟燭を次ぐ行為は夫婦の交互の共同作業でなければならぬ。どちらか一方の努力だけでは灯は消えてしまふ。「やもり」の「私」は女に対する愛がないというが、愛がなければそこから始めるしかないのである。また愛は子ども登場など人生の節目の様々な出来事によつて姿を変えていくものである。

夫婦の共同作業の典型は子育てである。「私」も彼女との結婚生活には「何の光明の予想」もつかないが、「彼女が子供を心から愛しているという事」は充分承知している。だから、「人に知らせない父親の子を抱いている女の身の辛さも考えて下さい」と言つた時の女の姿に、「頼りない女性の淋しい哀しげな表情」を素直に認めるのであつた。「愛」という翻訳語のない時、夫婦の結びつきは、同情や哀れみや慈しみからも始まつた。そして、現代の幼児虐待がはびこる社会では考えられないが、この頃はまだ「子は鎚」となり得た時代である。「こゝに」「やもり」主人公の夫婦生活の可能性があつた。そしてこの後、ついに「私」は父にすべてを打ち明け、現状を打開する方向へと動くのである。

電車に乗つて、東京駅に行く間に、私は今のやもりの事を考えた。見えなかつたもう一匹はどうしたろうと思つた。(中略)或はそのなやしつぶされたとか病気とかいう事は少しもなく、唯偶然に、(中略)姿を見せなかつたに過ぎないのかも知れない。(中略)私は自分の生活を、長い間じつと見守つて、何も彼も承知していながら、何も言わずに黙つていて呉れた親しい友の一人の安否を気遣つような、そついつた懸念を感じながら、東京駅の前で電車を降りた。

この見えなかつたやもりは一体何を表わしているのだろうか。「親しい友」とあるが、主人公の「私」は、このやもり夫婦に自己を投影している。だから、残つた一匹の「ちよろちよると尻尾」を振りながら、「妙に淋しく」見えたその姿には、夫婦のどちらかが欠けた「淋しさ」が反映している。つまり、この最後に一匹になつたやもりは、長年連れそつた伴侶を失つた時の悲しみのような影を引きずつているのである。その時の心情には、「愛」や「倫理」、「人情」といったような観念的なものは無い。自然に湧き出てくる悲しみである。

このように、二匹のやもりには、自然と調和し、自然の中で共同して分をわきまえながら生きていく夫婦生活のありようが示されていたのである。

五 終わりに

広津和郎が神山ふくとの愛のない結婚生活を描いた作品としては、「やもり」の他に大正七年一月「新潮」に発表された「師崎行」、大正八年四月「文章世界」に発表された「波の上」の三作がある。「師崎行」は、「やもり」の中でも触れたが、師崎に保養中の父を尋ね、この愛のない関係や長男の誕生を知らせ、「私」の精神的支柱である父との同居で現状を打開しようとする話である。実際、大正五年十一月には、妻や長男と片瀬に家を持ち、師崎の両親を迎えている。「波の上」は、この片瀬時代から、大正七年三月長女桃子の誕生直後、伊豆の西海岸へ逃げ出した時の心境を「兄」への手紙という形で綴つた作品である。この三作はいふなら、愛なき結婚三部作と呼んでもよく、作家広津和郎の「私小説」「心境小説」と見てよいものである。その意味で、「師崎行」も、「波の上」は書簡形式という小説の装いをとつてはいるが、どちら

も単なる日常私生活の苦惱の告白という域を出ていない。しかし、「やもり」は、この二作と比較すると小説としての完成度は高い。

「やもり」という象徴的タイトルと「やもり」や「鳥」「蜻蛉」など小動物に仮託された心情、またモーパッサンの「父」を下敷にした夢や老人のお告げの夢の配置。これも「私」の境遇や心情の象徴化の手法であった。その他、下宿の小さな庭にある柿の木の季節の変化や旅立つ前の嵐の後の東京の街の様子など巧みな自然描写の挿入。そして最後、東京駅で降り立つところで終わる構成。これはまさしく小説的結構そのもので、読者に様々な解釈の余地を与える結末となっている。たとえば、先に触れた「やもり」の最後の場面の解釈も、広津個人のその後の履歴から読むと夫婦生活の破綻と受け取ってしまいがちだが、師崎の父へ救済を求める旅は仄明るさに包まれており、破綻のイメージとは遠い。やはり、二匹のやもりには、「私」たち夫婦の姿を重ねてみる見方が妥当である。そして旅立ちには、「私」たち夫婦の再生への模索であった。

このように作品「やもり」は、単に広津和郎の「私小説」というよりは、当時のインテリが持つ精神的な弱さや結婚観がよく表わされており、大正の時代相の一つとして、普遍的な小説になっているといえる。

(本学非常勤講師)